

《書評》

Robert Reid, *Land of Lost Content*
—The Luddite Revolt, 1812—

London. 1986. pp. viii+334.

真 実 一 男

I

本書は副題にもあるとおり、1812年のラダイト反乱の記録である。よく知られているように、ラッデイズムと称せられる機械うちこわし運動は、1811—12年の第1次ラダイト、1816年の第2次ラダイト、1826年の第3次ラダイトと続くが、本書の詳述するそれはこのうちの第1次ラダイトに属する。(cf. 真実[13]第1篇第1章補論、ラダイト運動小史。)しかもこの第1次ラダイト自体は、ノッテングム、ランカシア、ヨークシアの3ラダイトから構成されているが、本書はもっぱらこのうちのヨークシア・ラダイトに関するものである。

著者のリード自身、ヨークシア・ラダイトの中心地であるウエスト・ライデング (West Riding)⁽¹⁾ のスペン溪谷 (Spenn Valley) の産であることから、かれはこのホームグラウンドで地方史料をもふんだんに使いこなしながら、情熱をもってこの著作に取り組んでいるようにみられる。もっともかれ自身はテレビやビデオ編集者の出身であり、経済史や技術史のプロフェッションではないようでもある。そのためであろうか、本書は一方で、たんなる史実の無味乾燥的な羅列に終ることなく歴史小説的描写によって読者を魅了してくれるが、他方では専門的な史料解釈で初歩的な誤りを犯すという欠点もみられる。

以下においてわれわれは、まず本書の梗概を紹介し、それにいささかのコメントをつけることにしたいが、その前にそのハイライトを紹介しておくことにしよう。

「……ヨークシア・ラダイトの中心地は、ランカシアに隣接するウエスト・ライデングの羊毛工業地帯であり、うちこわしの主たる対象をなしたものは、動力使用の新式ケバ切り機械 (shearing frame) であった。

[1812年] 2月末にハッダスフィールド (Huddersfield) 地方に起ったケバ切り機械の小規模なうちこわしをきっかけとして、3月15日までに同地区における被害は11件にもものぼった。さらに3月15日には同地近在のテイラー・ヒル (Taylor Hill) にあるヴィッカーマン氏 (Mr. Vickerman) の施設が破壊さ

(1) ヨーク州は三つの Riding からなり、East, North, West がそれらである。Riding は Thriding からでてきたもので、1/3を意味する。

れ、3月24日にはリーズ (Leeds) 近隣のロードン (Rawdon) にあるトムソン工場 (Messers Thompson's Mill) が襲われ、続く翌25日にはリーズのデイッキンソン氏 (Messers Dickinson) の屋敷が押入れられ布地を切りさいなまれるというように、事件は相継いで発生した。これに加えて4月9日には、自発的な機械撤去の示唆を拒否したホルベリー (Horbury) のフォスター氏 (Mr. Foster) の大きな工場が夜半襲撃されるという如く、機械うちこわしの脅威はつる一方であった。その中でも最も有名なものは、ブロンテ (Ch. Brönte) の小説《シャーリー》(Shirley) [2]にいぎいきと描かれている、4月11日のリヴァセッジのローフオールズ (Rowfolds in Liversedge) にあるカートライト工場 (W. Cartwright's Mill) の襲撃であろう。そして破竹の勢にあったラダイットたちも、ここで初めて頑強な抵抗に遭遇し、機械うちこわしに失敗して退却するという新段階に到達した。もっともこの襲撃に参加して重傷をうけた2名のラダイットに対するカートライト氏の冷酷な仕打は、労働者側の憎悪をかきたて、4月18日の同氏暗殺未遂事件および4月28日のごうまんなるホースフォール氏 (Mr. W. Horsfall) の暗殺事件にまで発展したが、これを境として機械うちこわしはその勢をそがれ、だんだんと下火になっていったことも争えぬところのようである。」(真実[13]pp. 38-39.)

以上は主として Hammonds[5]の叙述を書評者なりに要約したものであるが、本書は逆にそれを豊富に肉付けしたものと見えるかもしれない。

II

さて本書の叙述は、まずヨークシアのウエスト・ライデングという舞台描写から始まる。(cf. ch. 1.「舞台」)そこでは18世紀のその地が、親方と職人との間の家族的なつながりを基調とする豊かな羊毛工業の満足の土地 (Land of Content) であったことが、デIFOE (D. Defoe) の[4]によって立証される。

そしてそれにすぐ続けて、その舞台で演技する主要な人物の登場となる。「紳士」(ch. 2), 「新人」(ch. 3), 「人民の側の人」(ch. 4), 「労働者」(ch. 5) というそれぞれの標題の下に、ロバーソン (H. Roberson) とラドクリフ (J. Radcliffe); カートライトとホースフォール; ブロンテ (P. Brönte); メラー (G. Mellor) とベインズ (J. Baines) 等々の人物が出て来る。

まず「紳士」のうちのロバーソンは小説《シャーリー》(Ch. Brönte[2])の中でのヘルストーン (M. Helstone) のモデルであった戦斗的な国教会の牧師であったし、ラドクリフはこの地区の役人および治安判事としてラダイット鎮圧の矢面に立たされることになる。つぎに「新人」というのは新しい企業家精神をもつ資本家としての製造業者 (manufacturer) のことを意味し、カートライトとホースフォールの両氏が、新式機械の導入をめぐるラダイットとの直接対決に追込まれたことは上述したとおりであった。第3に「人民側の人」というのは、労働者側の心情にも理解を示す人という意味であり、ここではシャーロットを含むブロンテ姉妹の父であるパトリック (Patrick) のことを指す。かれもロバーソン同様国教会の牧師であったが、かつてはメソヂスト (Methodist) 派に属したこともあって非国教徒の信条にも理解をもつことができたのである。しかもスペン溪谷の労働者には国教会派よりもメソヂスト派が

多かっただけに、かれのここでの役割は重要であったはずである。そのうえブロンテ姉妹はこの地で生をうけたとすれば、《シャーリー》(1849)に対するシャーロット(1816—1855)の思い入れにも一しほのものがあつたに違いない。最後に「労働者」としては、ケバ切り職人や帽子職人等の職人層があげられる。このうちヨークシア・ラダイトの首領となるメラーは、若年ながら有能なケバ切り職人(cropper)であり、当時の職人にはまだマレであつた読み書きも出来たのみならず、職人層の中では高給取りの部類に属し、独身でもあつたために金離れもよかつたらしい。またかれの友人であり、かれの副官的役割を努めることになるソーブ(W. Thorpe)もまたメラーと同様のケバ切り職人であり、かれは隣接の作業場で働いてはいたが、メラーの職場であるウッド(J. Wood)の作業場にはよく姿を見せていたらしい。なお後にこの二人を裏切ることになるウォーカー(B. Walker)は、メラーと同じ作業場に属するケバ切り職人であり、いずれもラダイトの中核部隊を形成する職人層に属していた。これに対してベインズ(J. Baines, snr.)はすでに老境に入った帽子職人であつたが、当地における民主主義的・共和主義的思想を代表するリーダー格の存在であり、当地の職人層の尊敬を一身に集めていたようである。

III

さて本書の「1811[年]」(ch. 8)では、前年におきたノッテンガム・ラダイトのことが叙述されているが、ここではそれらをすべて真実[13](pp. 33-34.)にゆずり、当章では簡単にしかふれられていない当時の時代的背景を他の著作(Darvall[3], Smart[8])をも援用しながらのべておくことにしよう。

ところで当時のイギリスは、1803年から再開された対仏戦争であるナポレオン戦争の真只中にあり、ウェリントン(Wellington)はイベリヤ半島でそのナポレオン軍と交戦中であつた。事実ナポレオンはつぎつぎとヨーロッパをかれの支配下におき、イギリスの息の根を止めるべく経済封鎖をめざす大陸封鎖令(Continental System, 1806)を発動していた。これに対してイギリスもまた逆封鎖令(Orders in Council, 1807)によって応酬したため、イギリスの外国貿易は激減し、とくにランカシアの綿工業やヨークシアの羊毛工業などはその販路をなくし苦境に追込まれていた。それらに追討をかけたものがアメリカによるイギリス船舶および商品の立入禁止法(Non-Intercourse Act, 1809)であつたし、打続く不作による小麦価格の上昇(cf. Darvall[3]p. 21.)も手伝って労働者の家計は重圧にあえいでいた。

他方このような戦争の真只中においても、イギリスの産業革命は休むことなく進行中であつた。そこではランカシアの綿工業地帯のみならず、ヨークシアの羊毛工業地帯でも、新式機械の導入による労働者の排除という技術的失業の問題が浮上中であつた。それはマニュファクチャアや手工業における親方・職人関係を打ちこわし、機械を主とする新たな工場制度と資本・賃労働関係への移行を促進したが、前者における手職をもつた職人層が憎悪の標的として導入

された新式機械をえらぶようになったのも自然の成行であった。事実ヨークシアのウエスト・ライデングでも、「新人」によるケバ切り機械の導入が、ラダイットの発端を形成するようになったことは後述するとおりであった。

他方これらの危機的状況に対処すべき行政側の治安対策は、まことに頼りないものでしかなかった。1810年に狂人ジョージ3世 (George III) に摂政がおかれ、以降10年間はいわゆる摂政下のイギリス (Regency England) に入るが、この摂政もけっして英邁とはいえず、そのうえ1812年5月15日には首相パーシヴァル (S. Perceval) も暗殺されるというように、政情は極度に不安定であった。それに保守党の支配する議会もまた、経済不況打開のための各地から寄せられた陳情書の山を前にして、なんら有効な打開策を打ちださぬままに時を過す仕末であった。他方有効な財政力も警察力をも持合せぬ地方当局も非常事態に対しては、ロンドンからの特別警部や国内駐留軍の派遣を中央に要請するのが関の山という状態であったが、それとても急場に間にあうものではなかった。

要するに、ヨークシア・ラダイットに関するかぎり、大陸封鎖および逆封鎖による経済的苦境に加えるに新式機械導入による職人層の排除という追討ちこそがラダイット蜂起の主要原因をなしていたのであり、それを拡大させたものが行政側の治安対策の不備であったといってもよいであろう。

さて以上ながながとのべてきたラダイットの周辺部分の叙述をこれで打切り、以下ヨークシア・ラダイットそのものの経過を追うことにしたい。

IV

さて本書の「決断」(ch. 9) に示されるように、ヨークシア・ラダイットの発端は一方の側におけるカートライトによる新式ケバ切り機械の導入の決意と他方の側におけるメラーによるそれへの粉碎の決意であるとされる。しかし両者の直接対決が行なわれる前に、その前哨戦ともいべき騒ぎがみられる。

次章の「紛糾」(ch. 10) でのべられているように、2月23日の夜遅くマーシュ (Marsh) 村から1マイル離れたところにあるハースト (J. Hirst) 氏の工場を顔を黒く塗った多数の男が襲い、鋏やケバ切り機械を含むランヤの仕上行程に使用される機械のすべてを打ちこわしたのみならず、すぐにキビスを返してクロスランド・ムーア (Crossland Moor) のボールダアストーン工場 (J. Balderstone's Mill) をも襲ったという報が治安判事であるラドクリフの下に届くのは、2月24日の日曜日の朝のことであった。かれは事の重大性を認識して早速州選出の代議士であるウイルバーフォース (W. Wilberforce) に善処方を要請し、後者はそれをうけて内相ライダー (R. Ryder) を内務省に訪ねたが、不在のため次官のベケット (J. Bekett) にしか逢えなかったらしい。そしてベケットから其旨をきいたライダーはウイルバーフォースの顔を立てて当面20人ばかりの騎兵の一隊を動かすことにしたが、もし事態がさし迫ったもの

となれば、ウイクフィールド (Wakefield) から他の一隊を派遣することを約束した。しかしそのさい、要は治安判事自らが断固として事を処することであると諭すことも忘れなかった。これをうけてラドクリフはこの地域の製造業者をハッダスフィールドのクラウン・イン (Crown Inn) に集め、ウィリアム (William) の兄弟に当るジョン・ホースフォール (John Horsefall) を議長にして〈暴動鎮圧委員会〉 (Committee for Supressing the Outrages) を組織するとともに、情報提供者には100ギニアを与えるという提言をも行なった。

しかし情報提供者が現われるどころか、その後も騒ぎはいっこうに収まらなかった。すなわちゴルカー (Golcar) という近隣の村の製造業者ヒンチクリフ (W. Hinchcliffe) 氏は50人あまりの黒面のラダイットに襲われてケバ切り機械を打ちこわされたし、リンスウエイト (Linthwaite) のサイクス (J. Sykes) 氏もまた10台のケバ切り機械を粉砕されたし、同村のスワロー (S. Swallow) 氏も同様に仕上機械と道具を破壊された。

にもかかわらず強気のカートライトは、マースデン (Marsden) のテイラー兄弟 (Taylor Brothers) の所から新式ケバ切り機械の搬入をもくろむ。それはラムズデン (Ramsden) 運河を下たり、コロネ (Colone) 川とカルダー (Calder) 川との合流点まで船で運ばれ、それから車に積み替えられてスペン溪谷のカートライト工場に移されることになっていたが、途中で日が暮れてしまったため、ラダイットによって粉々に打ちこわされるというウキメにあった。

以上は1812年の2月中に起ったどちらかといえば小規模な機械うちこわしの頻発であったが、この傾向は3月に至るとやや規模を拡大してゆき、4月11日のカートライト工場襲撃というクライマックスをめざすことになるのである。

V

本書の「最悪への準備」(ch. 12) にものべられているように、3月に入ってもこうした動きは止まることをしらなかった。すなわち、13日には南クロスランドとロックウッド (South Crossland & Lookwood) の村々で、ケバ切り機械の粉砕がみられ、続いて15日早朝には、テイラー・ヒルの有力な製造業者ヴィッカーマン (F. Vickerman) の工場が襲われたが、ここでのラダイットはケバ切り機械を破壊しただけで他の機械はこれを不問に附したらしい。なお後者の襲撃の通報をうけた第2重騎兵隊 (the 2nd Dragoon Guards) の分遣隊は、駐留地から2マイル離れたハッダスフィールドのウマヤまで引返して装備を整えねばならなかったため、現地に到着した頃にはラダイットはかれらの作業をすませ散り散りばらばらになっていたという不手際もみられた。

これらに対してヴィッカーマンを先頭とする製造業者たちは直ちにジョージ・イン (Georg Inn) に集まり強い言葉の決議をラドクリフに手渡して内務省に圧力をかけさせ、もし歩兵がえられないようであれば、せめてロンドン警視庁からの警部を派遣してほしいと迫った。

さらにリーズ連隊司令官のキャンベル大佐 (Colonel Cambell) の意見具申等によって、い

ままでラドクリフの要求を冷淡にあしらってきたグレー将軍 (General Gray) もようやく事の重大性に気づき始めた矢先の24日には、リーズの外側にあるロードンのトムソン工場 (Thompson's Mill at Rawdon) が襲われ、すべての機械が打ちこわされた。のみならず翌25日にはリーズのデイッキンソン工場 (Dickinson's Mill) が押入られ、完成したラジャ地からリボンまでが切りさいなまれた。これらに対して絶望的で弱気のホルベリー (Horbury) の治安判事などは、これらの暴力に対する唯一の解決策はすべての製造業者がかれらの機械を取りはずすよりほかに手がないと示唆する仕末であった。

さらに「連絡路線」(ch. 14) での記述にもあるように、4月に入っても9日にそのホルベリーのフオスター (J. Foster) 氏の家屋と工場が襲われケバ切り機械を打ちこわされ、ラダイトの行動は傍若無人をきわめ、製造業者の不安はつものる一方であった。

VI

このようにしてついに、ヨークシア・ラダイトの頂点となる4月11日のカートライト工場の襲撃がくる。そしてここで初めて破竹の勢を誇ったラダイトも、カートライト側の頑強な抵抗をうけ、機械うちこわしに失敗して敗走し、これを峠にさしものヨークシア・ラダイトは下火にむかうこととなった。以下《シャーリー》[2]その他の諸文献をも織りまぜながら、本書の「ローフォールズ」(ch. 15) の記述をたどってみれば、つぎのようにもなる。

襲撃側の隊長はロングロイド・ブリッジ (Longroyd Bridge) のメラーであり、かれにはソープ、ウオーカー、スミス (T. Smith) がつき従っていた。このうちソープはメラーの盟友で副隊長格の地位にあり、あとの2人は下級指揮官としての役割を担わされていた。メラーによって、もしできるなら武器をもって、11日の深夜にダンプ・ステイプル (Dump Steeple) のオベリスクに集合するようにと指令された総勢は、少くとも200名から300名に達していたらしい。

その中には、メラーの顔見知りの面々が数多くみられた。ロックウッド (Lockwood) 村からはブルック (Brook) の家族3名がきており、その1人であるトーマス (Thomas) は小さな作業場の親方であり、このことは職人のみならず小親方までが新式機械の導入に反対の立場であったことを示していた。他のハッダスフィールド近在の村々からは、ヘイ (J. Haigh)、デーン (J. Dean)、オグデン (J. Ogden)、ウオーカー (J. Walker)、ドレイク (J. Drake) 等々の中核分子も参加していた。そのうえメラーに原始社会主義的理想を教込もうとした若きブース (J. Booth) の顔なども、そこにみられた。リヴァセッジからは、ハースト (J. Hirst) が到着していた。かれとかつてローフォールズのカートライト工場でケバ切り職人を務めていたハートレイ (S. Hartley) との2人に、ハーツヘッド・ムーア (Hartshead Moor) をこえてカートライト工場までの案内役をさせるというのが、メラーの心づもりであった。同じくリヴァセッジの出身であるホール (W. Hall) とリッグ (G. Rigg) はシンガリ役となり、主

力からの分散者を阻止するように命ぜられた。

メラーは早速総勢の部隊編成に取掛り、全員は横隊に整列させられ、名前を秘匿するために各自に番号が与えられた。そして変装のため、仮面をもっているものはそれをつけ、もっていないものは墨で顔を黒く塗るよう指令された。また当時の風習にならい、ハゲ隠しのための帽子の着用もい渡された。

その夜の11時近く部隊は、つぎのような構成で、集合地点から3マイル離れたローフォールズへの進撃を開始する。すなわち、メラーの直接指揮下のマスケット銃隊、ソープの指揮するピストル隊2隊、斧およびハンマー隊のそれぞれからなり、最後の隊の中にはグレイト・エノックス (Great Enochs) とよぶ大ハンマーを担ぐものもまじっていた。カークリーズ (Kirklees) 近くの原野の間をのぼり、ハーツヘッド・ムーアの積荷馬道を横切って、スペン溪谷の高みに点在するハイタウン (High Town) の小屋附近に到着するまでの最初の行程は、もともと困難であった。そこから部隊はスペン溪流の南岸に下ってゆき、そこで隊伍を整えるとともに、隊員への休息を指示した。その後ハーストとハートレイの案内でメラー隊を先頭にして工場に突入し、外側を警備していた2人の労働者を苦もなく取押えてサルグツワをはめ縛りあげること成功した。

他方ベッドに入ったばかりのカートライトはまず犬の鳴声によってかき起され、すぐさま応戦態勢に入る。かれは発火準備ずみの銃を輩下の労働者と兵士とに手渡し、かねて指図しておいたとおりに2階窓辺の胸壁をもつ板石の背後の部署につかせ、かれ自身をも含めて1階のラダイットめがけて射撃させることにした。またカートライト側の1人は、鐘を打ちならして、この急襲を溪谷中に知らせるように命じられた。

さて1階の工場内部は3人のカンバーランド (Cumberland) 民兵によって防衛されており、そのうちの1人は懸命の掃射を行ったが、あとの2人は手をこまねいて何もせず、しかもそのうちの1人は暖炉に退き射撃に復帰せよというカートライトの命令をも拒否する仕末であった。

これに対してメラーのマスケット銃隊は1階の窓を破壊したのち、ピストル隊を入れ、最後に斧・ハンマー隊によって工場のドアを打ちくだこうとした。しかしドアの木造部分に穴をあけることはできたものの、飾釘のついた金属枠は容易に破碎することができなかった。そうこうするうちに、カートライト側の狂気の如き奮戦によって、襲撃隊の進入は思うに任せず、負傷者が出はじめるとともに無傷の者の中からも逃走者が続出するに至った。ここに及んでメラーも、総崩れになった襲撃隊を立て直すことを諦め後退するほかに途がなかった。かれの周辺には、水に濡れ帽子を流したブルック、カートライト側のマスケット銃でうたれ肩に傷を負ったヘイ、溪流で濡れネズミになったホール、少くとも負傷した1人が工場の外側に置きざりのままであると報告するウオーカー等々がいるだけであった。

戦いの終わったカートライトの硝煙立ちこめる工場には、2名の負傷者が取残されていた。そのうちの1人はブース (J. Booth) であり、かれはロームーア (Lowmoor) 在の牧師の19才

になる息子であった。もう1人はハートレイであり、かれはかつてカートライト工場に雇われており、カートライト自身が指揮するハリファックス (Halifax) 民兵でもあった24才のケバ切り工であった。しかもいい伝えによれば、負傷者の1人が求めた助けに対して、カートライトはこれを拒否してまず襲撃の指揮者名の告白を迫ったとされる。しかしその場に居合せたその地方の化学工場の支配人デイクソン (A. Dixon) は、ワインをとりゆき負傷者2人の口元を濡らしてやったし、リトルタウン (Littletown) の居酒屋から深夜帰宅途中のクロウ (B. Clough) は、かれらの頭に石で枕を与えてやったらしい。おそらくこのことによって、カートライトは非情な工場主としてのイメージを与えられることになり、《シャーリー》[2]にムーア (R. Moor) として描かれたヒーローやゼントルマンとしてのかれの声価を損なうことにもなった。

なんらかの情報をえんとその臨終に立ちあつた牧師ロバーソンも、その目的を果せぬままにブースの死を迎えることをよぎなくされた。またもう1人のハートレイの胸部からはマスケット銃弾を取出す手術が行なわれたが、そのさい外科医の使用した硝酸によってマットが汚染していたことから、自白のための拷問が瀕死のかれに加えられたのではないかという憶測さえも生れた。そしてそのハートレイも、出血多量のため、翌朝の3時には死亡する。

他方敗退したメラーの一行は、暗い谷間のもときた途をたどり、ハイタウンの1軒の小屋を訪づれ、そこの住人のネイラー (S. Naylor) から、彼の夫の帽子を借出し、ブルックにあてがうことにした。さらに1哩歩いて、クリフトン (Clifton) の村のブルック (Brook) の小屋の明りをみつけて、かの女からマッフインパンと水さし1杯の水をわけて貰い、ムーアを横切り、コロソ溪谷をよじのぼり、ようやくかれらの宿所に逃げ帰ることができた。

VII

ローフォールズ事件後の成行に関しては、本書の「同情の波」(ch. 16)にもあるように、世人の同情はむしろラダイットの側に傾むき、そのため告発に必要な証人は皆無の状態にあった。そのうえ2名の負傷者ブースとハートレイの取扱いをめぐるカートライトとロバーソンの仕打は、世人の反感をつのらせていた。事実4月15日に行なわれた埋葬のためにハートレイの遺体をハリファックスに移送するさいには、大群集がこれにつき従がい、棺桶が街中を通りすぎる間腕に白いクレープの喪章をつけた労働者がパレードをして、教会の墓地まで送り届けるという光景もみられた。このため当局側は、翌日のブースの葬儀に当っては急遽その前夜に遺体を秘密裡に移送して、これを翌日の早朝に埋葬して騒動の可能性を未然に防ぐという、手だてをとらざるをえなかった。

また次章「くらやみの銃撃」(ch. 17)にあるようにカートライトは、自己の工場が襲撃されたとき炉辺に後退してラダイットに銃をむけることを拒否した例のカンバーランド民兵隊の1兵士を許すことができなかった。そしてその事実を民兵隊の指揮官に報告し、4月18日にハ

ッダスフィールドの軍法会議に証人として出席した。その結果その兵士は300回の笞刑に処せられることになった。当のカートライトはそれからの帰途にハッダスフィールドの端のひらけた田野にたどりつき、広い道路を区切る堤の茂みの間にかれの馬を進めていた。その時堤の両側に隠れていた2人の男が立上り同時にピストルをカートライトにむけて発射したが、弾はかれをそれてかれは九死に一生をえてローフォールズに逃げかえった。

他方ローフォールズ襲撃に失敗し2人の犠牲者をだしたメラーのつぎの作戦が、再度新式機械を導入した工場の破壊を計画するよりも、その持主を暗殺することによってその目的を達成させようとするものであったことは、本書の「恐しき時節」(ch. 18)にのべられているとおりであった。

事実4月27日のラドクリフ宛の手紙はホースフォールやその義兄弟のアトキンソン (T. Atkinson) の暗殺を名ざしで指定してきていたが、翌28日にはついに前者のその実現をみた。すなわちハッダスフィールドのロシア市場からかれのマースデン工場への帰りみちにあったホースフォールが、馬でパル (H. Parr) 氏の大農場の一番近い曲り角まできたとき、突然ピストルによって狙撃された。その音をききつけて走ってきたパルによってホースフォールはウオレンナー・ハウス (Warrenner House) に運ばれ、クイーンズ・ベイ (Queen's Bay) 騎兵隊の若い補助外科医のケンニイ (M. Kenny), さらにはハッダスフィールドの町外科医による手当がなされたが、出血多量のため施すべがなかった。これは後で判明したことであるが、このときの犯人は、メラー、ソープ、ウオーカー、スミスの4人組であり、メラーの最も信頼するグループによって構成されていた。もっとも実際に狙撃したのはメラーとソープの2人で、あとの2人は傍観者としてその場所に立っていたらしいようである。

いずれにしても、生き残ったラドクリフ、カートライト、アトキンソン等は暗殺におびえる毎日を過ぎねばならなかったのみならず、ラドクリフの下には摂政殿下や首相パーシヴァルを誹謗し、パリでの革命にならい労働者および一般人民の一斉蜂起を促がす脅迫状も舞込んできた。

しかし本書の「急進的改革派」(ch. 19)でものべられているように、ラダイットと革命ないし政治改革との結びつきは希薄であつたらしい。当時の急進改革派の首領と目されるバーデイト (F. Burdett) にしろ、カートライト (Major J. Cartwright) にしろ、中産階級の選挙権獲得には熱心であったとしても、労働者階級、別して北部のラダイット運動には冷淡でしかなかった。すなわち「1812年には社会構造の変化を向うみず求めるイギリスの急進運動に関するかぎり、一つの顕著な特徴が存在した。一方においては、北部の圧倒的に巨大で調整されない労働者の運動があった。他方では、南部の圧倒的に小規模で秩序だった中流もしくは上流階級の運動があった。しかしこの両者は、接触点をもたなかった。」(本書, p. 145) というのが実情らしく、ラダイットには全国蜂起のための組織もなければ、その指導者もいなかったといえよう。そしてこれとは逆にヨークシア・ラダイットに関するかぎり、体制側の治安対

策が徐々に効果をあげ、メラーを中心とするラダイトはしだいに窮地に追込まれてゆくことになるのである。

VIII

ここでラダイト制圧に登場する1番手がメイトランド (T. Maitland) —ア克蘭ド (W. Acland) —レインズ (F. Raynes) の軍隊作戦であり、それは本書の「メイトランド」(ch. 20), 「指揮官」(ch. 23), 「レインズ」(ch. 25), 「さようなら, グレイ」(ch. 26) の諸章に展開されるとおりである。そしてまたそれはランカシア・ラダイトの場合と同様に, ヨークシア・ラダイトにも有効であった。それに加えて, これまたランカシア・ラダイトの抑圧に異常な執念をみせた法廷代理人 (solicitor) のロイド (J. S. Lloyd) も, 当地の治安判事ラドクリフとは対立を繰返しながらも, かれ独自の鎮圧活動に邁進する。

しかし第7代ローダデール (Lauderdale) 伯の次男であり, 経済学者であった第8代ローダデール伯の弟でもあったメイトランドは, もともとランカシア (チェシアを含む) 方面担当司令官であり, ヨークシアの担当はグレイであったので後者をさしおいて大っぴらにヨークシアの治安には介入できない事情があった。しかもメイトランドは持前の強引さを発揮して1812年5月に入ると, ウェスト・ライデングの州治安長官 (Lieutenancy) の会議をウエイクフィールド (Wakefield) で開催することを提案した。そのさい一堂に会したのは, 州治安長官のフイックウィリアム (Lord Lieutenant W. Fitzwilliam) を始め, ラドクリフを含む各地区の治安判事, 州長のスリングズビー (High Sheriff T. T. Slingsby) 等々であったが, その席にはグレイの姿もみられた。そこでのメイトランドはこの地方の住民が軍隊に頼ることなしに自衛策を講ずべきことを力説するとともに, フイックウィリアムの利用可能な義勇兵ないし民兵の12,000名を4隊に分けたうえでそれらのすべてをメイトランドの指揮下におくことを要求した。このようにしてメイトランドによるグレイ追出策の第一歩が踏みだされた。

他方本書の「医者」(ch. 24) にもあるように, ロンドンでは5月15日のパーシヴァルの暗殺によって政権はリヴァプール (R. Liverpool) に移ることになったが, それとともに内相もライダーからシドマウス (Sidmouth) へと交替する。そしてこの後者の手で, 新たな弾圧立法としての〈治安維持法案〉 (the Preservation of the Public Peace Bill) と〈不法宣誓法案〉 (the Unlawful Oath Bill) の2法案が議会を通過する。このうち前者は武器の捜査および不穏集会の解散に対する治安判事の権限を強化するものであり, 後者はラダイトが結社保持のためになさしめる宣誓に対して, これを行なわせたものを死罪に, これを行ったものを終身流刑に処すというものであった。これらをうけてラドクリフやロイドによる被疑者の逮捕や訊問には, 一層の拍車がかけられることにもなったのはいうまでもなかった。

さてシドマウスと密接な文通を保持しながらグレイの追落としをはかるメイトランドは, グレイの不人気に乗じてシドマウスに婉曲ないい廻しでグレイの解任をせまり, かれが結婚のため

のの3ヶ月の休暇をとるようにしむけることに成功する。かくてメイトランドは、ランカシアのみならずヨークシア全体をもかれの指揮下におくことができ、ここに本格的なヨークシア鎮圧作戦のための体制作りを完了する。

メイトランドのやり方はランカシアのそれを踏襲するもので、中核地点に強力な部隊を駐屯させるとともに、小部隊による機動的パトロールを周辺地帯に実施するというものであった。メイトランド中將はアクランド少將にハッドスフィールド常駐を命じ、1,000人の部隊をそこにはりつけた。その配下にあつて活動すべきレインズ大尉はペンナイン (Pennine) をこえてかれのコマンド部隊をウエスト・ライデングに連れてくるようにと命じられ、到着後は重騎兵の分遣隊および西サホーク民兵隊 (West Suffolk Militia) の3個中隊の指揮をもゆだねられた。かれは騒擾の中心地であるローフオールズ近いミルブリッジ (Millbridge) に常駐し、ブラッドフォード、ハリファックス、ハッドスフィールド、ウエイクフィールド、リーズに囲まれる地域を自由に行動してよいことになっていた。しかもその巡回の目的は、住民に恐怖をうえつけ、被疑者の逮捕を行ない、できるかぎり苛酷な見せしめの懲罰を与えることにおかれた。そのほかにもレインズはいがみあうラドクリフとロイドの仲介役をもつとめ、当面の間かれらは少くとも協力してラダイット狩りに努力することにもなった。その結果3者の前には、スパイや情報提供者による諸情報がまとめられ、被疑者の履歴一覧表が作成されるまでになっていた。

しかしこれらにもあきたらずメイトランドは、マンチェスターの副警察長官ナーデン (J. Nadin) からマクドナルドとゴスリング (J. M'Donald & J. Gossling) という2人のスパイを派遣して貰い、ベインズの家で不法とされているラダイットの宣誓をそのうちの1人に行なわせるようにもしむけた。かれはまたそれと同時に、もしラダイットが罪を自白し、国王側 (体制側) のために証言すれば、赦免に預かれることをも周知させて、ラダイット側の結末にクサビを打込む算段をもめぐらせた。

IX

本書の「匿名の手紙」(ch. 28)でも展開されているように、ラダイットへの包囲網はだんだんと狭められてゆく。まず9月に入ってからのラダイット狩りのキッカケを作ったのがパーキン (E. Perkin) というコソ泥の逮捕であったが、それによってイモづる式に数人のギャングがつかまった。そしてかれらはロイドの脅しによって国王側の証人になることで罪を免れようとした。同じくメイトランドがもぐりこませたスパイによる不法宣誓のカドで、ベインズとそこに居合せた5人 (ベインズの息子の15才になるザカリア [Zarkariah] をも含めて) も9月14日にヨーク (York) の監獄送りになった。

なかでも決定的な転機となったものが、ラドクリフの郵便受に投じられた Mr. V という匿名の手紙であった。そこにはホースフォールの射殺犯人は、ハッドスフィールドに住むジ

ジョージ・メラー (Joseph Mellor) の兄弟とロングロイドブリッジに住むジョージの甥に当るジョージ (Geoge) の2人であるというものであった。そしてこのVはほかならぬジョージのダンジョンウッド (Dungeon Wood) の作業所で働いていたヴァーレイ (Varley) であり、この Varly はまたジョージ・メラーの働いていたウッド (J. Wood) 作業所のジェイムズ (James Varley) の甥に当たっていたらしい。これらの面々の訊問によって、そしてジョージ・メラーの強固な犯行否認にもかかわらず、メラーはホースフォール暗殺容疑でヨークの監獄送りとなった。

しかしジョージ・メラーの告発のための証言はいまだ十分とはいえず、当局側は有力な証人探しに奔走していた。そして本書の「国王側の証言」(ch. 29) にみられるように、このように強固なラダイト側の防禦壁に穴をあけたのはロイドの執念の賜物であった。かれはたまたまハッダスフィールドの羊毛商人の所にコロソ溪谷の1夫人が助言を貰いに訪れたという情報をキャッチした。その商人は約束を守って夫人の名前を秘匿し通したが、ロイドはその商人宅を訪れる人々を監視することによって、それがベンジャミン (Benjamin) の母親のウオーカー夫人に相違ないことをつきとめた。ウオーカー夫人はロイドの脅しに耐え抜いて息子の名前こそ明らかにしなかったが、ホースフォール事件に関与するものとしてソープの名を洩らしてしまった。即座に拘束されたソープは何事も喋らなかったが、同時に拘禁されたベンジャミン・ウオーカーの方は、4日間にわたるロイドの執拗な追求によって10月22日にはついに口を割ってしまった。ただし国王側の証言を行なうことによってかれ自身の免罪を条件付としてのことではあったが。

このウオーカーの陥落によって、ホースフォールの暗殺がメラーとソープおよびそれにスマイスとウオーカーの2人を加えた4人でなされたこと、ローフォールズの襲撃を頂点とすラダイト騒乱の首謀者がメラーであることも判明した。それとともに、例えばローフォールズ襲撃のさいにはメラーのそばにおり、職場ではメラーの同僚でもあったホール (W. Hall) のように、国王側の証人に寝返ることによって自己の命を救おうという者が続出して、ここにラダイト側の総崩れが引き起こされた。

そしてこれらに輪をかけたものが、不況緩和のキザシであったといえよう。すなわち、1812年10月18日に始まるナポレオンのモスコウからの退却はかれのイギリスに対する大陸封鎖の続行を不可能にし、ランカシアの綿工業に引続き、ヨークシヤの羊毛工業にも市場の回復がもたらされ、労働者階級の苦境にもどうやら和らぎが望みうるような状況になってきた。

弾圧とともに労働者階級の困窮にも目くばりを怠らなかつたメイトランドは、このタイミングに乗じてラダイトに対する一罰百戒の裁判の実施と刑の執行およびその事後処理に全力を投入する。その方策の第1としては、ランカシアでの38人の無罪裁判⁽²⁾の愚を繰返さぬためにも、来るべきヨークシヤの特別裁判 (Special Commission) では、その時の寛容な判事で

(2) これはバックレイ (J. Buckley) を中心とする平和と議会改革をめざす進歩的グループの秘密集ノ

あったベイリイ (Mr. Justice Bailey) 等を排除することであつた⁽³⁾。その第2は、ラダイットに同情をよせる住民側を刺戟させぬためにも、メラーおよびかれの仲間が処刑された場合の遺体の処理方法等を考えることであつた。このうち第1の点に関しては、当のベイリイが任を外されたことで解決した。また第2点については、すでにヨークシア入りをしていた国王側を代表する大蔵省法定代理人ホブハウス (Treasury Solicitor, H. Hobhouse) の意見をも入れて、ヨークでの処刑後メラーたちの遺体をリーズの外科医の解剖に附することによって、住民による葬送行列ないしは騒擾を未然に防ごうとするものであつた。

X

このような特別な準備のうえで、いよいよヨークの特別裁判が1813年の1月2日(土曜日)から開始される。本書の「防禦」(ch. 32), 「裁判」(ch. 33), 「復讐」(ch. 34), 「虚妄の州」(ch. 35)の諸章で展開される裁判から処刑までの経過をたどってみれば、つぎのようにもなるう。

まずその法廷構成のトップにくる判事には、チェスター特別裁判で悪名を馳せたトムソン (Sir A. Thomson) とルブラン (Sir S. Le Blanc) があてられる⁽⁴⁾。つぎに検事側としては、パーク (J. A. Park) およびホブハウスに雇われたかのロイドとアリソン (J. Allison) とが、弁護側には無能なブラックバーン (Blackburn) とそれとは対照的に当時名声の高かったブルーム (H. Brougham) がそれぞれ据えられた。

さて本格的な裁判は1月4日の月曜日から開始されるが、この日はラドクリフを含む23名の大陪審の宣誓が行なわれたのみであつた。翌5日から12日までの丸々1週間に及ぶ裁判の結

\\会がスパイのために逮捕され、38名が不法宣誓施行の罪名で起訴され、無罪となった事件をいう。(cf. Hammond [5] pp. 241-243.)

なおランカシア特別裁判によるランカシア・ラダイットの有罪者も38名であつたところから、両者の混同が引起されてきたことについては、真実[13] p. 41の注(9)を参照のこと。

(3) この点リイドにはベイリイや後述のトムソンおよびルブランについて、誤った記述がみられる。すなわち、「ランカシアでの[ランカシア特別裁判における]判事ベイリイ氏の判断から生じた争論は、大法官にある困惑を引起していた。かれがヨークで開廷すべく選んでいた判事は、寛容に対して同様な評判をもたなかった。……サー・アレクザンダー・トムソン (Sir Alexander Thomson) とサー・サイモン・ルブラン (Sir Simon Le Blanc) は、数人のラダイットをポテトを盗んだハンナ・スミス (Hannah Smith) と一緒に死刑を宣告した5月のチェスター特別裁判で以前に一緒に開廷に當っていた。」(本書, p. 233) とあるが、これは二つの点において間違っている。第1にベイリイはランカシア特別裁判ではなく、ノッテングム・ラダイットの春季巡回裁判で起訴された9名に対し、成立したばかりのフレーム破壊法案 (frame work bill) に依拠することなく、無罪2, 7年ないし14年流刑7の軽量判決を言渡した判事であつた。また第2にトムソンとルブランは、チェシア特別裁判の担当ではなく、当のランカシア特別裁判の担当判事であり、チェシアのそれはダラス (Mr. Justice Dallas) とバートン (Mr. Justice Burton) であつた。(cf. Hammond [5] p. 218 & pp. 236-240.)

(4) 前注(3)をも参照のこと。

果は、死刑17, 終身流刑1, 7年流刑6という重刑者を出す厳しいものであったが、ここではその詳細をすべて Report [7]に譲り、以下では1月5日の水曜日に行なわれたメラー、ソープ、スミスのホースフォール暗殺事件の裁判のみを紹介しておこう。

さてこの時の判事はルブランとトムソンであり、検察側にパーク、弁護側にブルームという布陣であった。検察側の証人には、まずホースフォールが狙撃後最初に運びこまれた居酒屋ウォレンナア・ハウス (Warrenner House) の亭主、次にパル、そこで出血の手当をした外科医ハウトン (R. Houghton)、ホースフォールの身内のアブラハム (Rev. Abraham) 師とジョン (John) が続いた。しかし決定的証言となったものは、メラーたちとその狙撃に参加したウォーカーとメラーの職場仲間のホールによるものであった。この2人の国王側への裏返り証言に対して弁護側のブルームの反対訊問は効を奏せず、ブルームは初めからこのケースの勝目の薄さを予知していたせいも、いつもの熱心さと精彩ぶりをまったく欠く仕末であった。しかも弁護側の証人はすべてメラーたちのアリバイ作りに口裏をあわせるという作戦にでたが、メラーの働らくウッ드의作業所の徒弟バウア (J. Bower) の証言が他の証人のそれらとのソゴを来たすことによって、それらは破綻のウメキをみた。

ルブランはこの点を鋭くついて、もし弁護側の証言者たちがデッチ上げをしたのでないとするれば、暗殺の起った前年4月とラドクリフによって取調べの行なわれた前年10月との間の時の流れが各人の記憶を不確実にしたのであろうとしめくくり、夜の8時10分前に陪審員に判決を要請した。12人の陪審員は別室に退き、25分間の協議ののち、全員に有罪の判決を下した。これをうけてルブランは3人に死刑を宣告し、ブルームによる恩赦の要請を却下して、刑の執行を3日後の1月8日に行なうことをも宣言する。先にみたメイトランドの遺体処理策とも考え合せれば、当局側によるメラーの早期抹殺の意図は歴然としていたといえよう。

このあと1月8日の上記3名、1月16日に他の14名の絞首刑も公開で執行され、このような大量処刑によってラダイット側の敗北は決定的となり、メイトランド、ホブハウス、トムソンおよびルブラン等を含む体制側は、鎮圧の目的を達しえたといってもよかった。

XI

以上連綿として1812年のヨークシア・ラダイットの成行を克明に追跡してきた著者リードは、一転して本書の「技術の法則」(ch. 37)において、ラダイット敗北の真因としてのかれの技術史観を展開する。同章で頻発する「技術の法則」(the Law of Technology)や「技術の不可逆性」(the Technology's Irreversibility)という言葉によってかれの意味する所は、技術進歩は自然の法則であり、技術がひとたび導入されれば、それは立法によっても暴力によっても阻止不可能であるということのようである。もちろんかれとても18世紀末から19世紀初頭にかけてのイギリスでの産業革命の時代には、技術進歩の速度が著しく、導入された新式機械によって労働者が排除され、それへの阻止のための反抗としてのラダイット運動が必ずしも理

にかなっていないとはいえないという事実をも承認する。しかしかれの場合「社会の富はその技術の主たる産物である」(本書, p. 283) とすれば、技術導入の副産物としての失業や環境破壊等もぎりぎりの所止むをえざるものに終り、しかもそれらを緩和すべき諸立法——例えば工場法, 教育法, 労働組合法等々——も技術の生みだした富そのものによって始めて生成可能になるはずであるともいう。

だとすればかれにとって、1812年のヨークシア・ラダイトは、その意図に十分な理解が示されうるし、かれらの心情にも共感が寄せられうるとしても、所詮は技術進歩の流れに逆行する歴史の1エピソードでしかなく、かれらの破局もまた当然であるということにもなりそうである。そしてまたこのようなかれの見解は、育ちゆく労働者階級の意識形成に大きな役割を果したとしてラダイトを積極的に評価せんとするトムソン (E. P. Thompson) 等とは対極的位置を占めるものといえそうである。書評者はむしろトムソン等の立場 (cf. Thompson [10] & [11]) に組するものであるが、その詳細については、真実[14]を参照してほしい。

XII

最後に本書に対する書評者の若干のコメントを付することによって、この書評のむすびに代えることにしたい。

まず本書のメリットは、かれ自身がスペン渓谷の出身であるという利点を生かして、地方史料や回想史料をふんだんに使用しえたのみならず、⁽⁵⁾かれのテレヴィやビデオ編集者としての特技をも駆使してヨークシア・ラダイトをノン・フィクション風にまとめあげ、読者の興味を地方史にむけさせえたという点におかれよう。そしてまたその過程でいままでの地方史に若干の補正を加えることも可能となった。⁽⁶⁾

しかしかれの最大の欠陥は、おそらくかれの技術史観から派生してきたと思われるノッテングラム・ラダイトへの誤れる史料解釈であろう。すなわちかれは、「さて産業革命の発明的怒濤の真只中の1803年頃は、〔編物〕機械を広幅化し、それが操作のさい比較的熟練していない労働によっても十分に使用されるほど単純でありうることが判っていた。それが生産したより大幅な編物の片々は、より品質の劣ったものであり、またそれは裁断された靴下 (cut-up stockings) を作るのに使用された」(本書, p. 58) というのみならず、「この新しい技術が、それにすぐ引続く事件〔ノッテングラム・ラダイト〕に対する引金であった」(ibid.) ともい

(5) まず Manuscripts としての Fitzwilliam Papers (Sheffield City Library) や Radcliffe Papers (Leeds District Archives) があげられる。そのほかにも, Brönte [2], Peel [6], Sykes [9] などのよくしられた二次資料があげられる。もっともこれらの二次資料はすでに穂積[12]にも利用されている所ではあるが。

(6) 例えばピール[6]では£2000の報酬金目当にウオーカーがかれの母をラドクリフの下にやったとしている所を、内務省文書 (Home Office Papers) を使って、かの女の目的はお金ではなくて息子の安全であったこと、またかれを告発に追込んだのはウオーカー自身であったというように訂正している。(cf. 本書, p. 310. note 6.)

う。ここではあたかも広幅機械という新式機械の導入がノッテンガム・ラダイットの主原因であり、ノッテンガム、ランカシア、ヨークシアの3ラダイットとも同原因によるものであるという解釈が施されているようである。しかしノッテンガムにおける広幅機械が新式機械なのかどうかは、疑問であろう。事実はいままでPantaloonsと称する長靴下やTwillsとよぶ変り靴下を作っていた既存の広幅機械を転用してふつうの長靴下などをつくりこれを裁断して粗悪なcut-up ものを作ったのみならず、その過程で職人に代えて徒弟を不正に使用したというのがノッテンガム・ラダイットの主因をなし、そしてまたその点こそが新式機械の導入を主因とするランカシア、ヨークシアの両ラダイットと区別されるべき特徴でもあったことは、経済史家の常識に属する所である⁽⁷⁾。

さて書評者はかつて、1970年代までのイギリスにおけるラダイット関係の諸文献を書評論文(真実[14])にまとめあげたことがあった。そしてその末尾において、ラダイット研究のために残された問題としての地方史の積上げを要望しておいたが、本書は以上の欠陥にもかかわらず、ヨークシアのウエスト・ライデンの地方史に加えられた1文献として今後も確固とした地位を要求しうるであろう。いずれにしても、ヨークシア・ラダイット研究にさいしてかつてひもといたブロンテ[2]、ピール[6]、シャイクス[9]以来、久しぶりに肩のこらない読書のひとときを与えられた事に対して、書評者は著者に感謝したい気持ちもある。(1992—3—21; 1992—7—6 加筆)

〔引用文献〕

- [1] Aspinall, A. & Smith, E. A., ed., English Historical Documents. Vol. XI 1783-1832. 1959.
- [2] Brönte, Ch., Shirley. 3 Vols. 1849. [Penguin Classics, ed. by A. & J. Hook. 1974.]
- [3] Darvall, F. O., Popular Disturbance & Public Order in Regency England, being an account of the Luddite & other disorders in England during the years 1811-17 & of the attitude and activity of the authorities. 1934. [Reprinted by A. M. Kelley. 1969.]
- [4] Defoe, D., A Tour through England & Wales, divided into circuits & journies. 3 Vols. 1724-26. [Everyman's Library. 2 Vols. 1927.]
- [5] Hammond, B. & J. L., The Skilled Labourer, with general introduction & bibliographical note by J. Rule. [New Edition.] 1979.
- [6] Peel, F., The Risings of the Luddites, Chartists & Plug Drawers. 4. ed. with a new introduction by E. P. Thompson. 1968.
- [7] Report of Proceedings under Commissions of Oyer & Terminer and Gaol Delivery, for the County of York, held at the Castle of York, before Sir Alexander Thomson, Knight, one of the Barons of the Exchequer; and Sir Simon Le Blanc, Knight, one of the Justices

(7) この点は、例えば Aspinall & Smith, ed. [1] の記述が明快である。すなわち「1811—12年のラダイット騒擾は、新しい機械の使用に対してではなくして雇用者のある営業のやり方に対してノッテンガムで始った。他方ヨークシアの〔ラダイット〕騒擾は主として〔新式の〕ラシヤ仕上機械(cloth-dressup machinery)の導入に反対して指向された」(p. 531)とされる。なおこの点については、真実[13] p. 34をも参照のこと。

of the Court of King's Bench; From the 2nd to the 12th of January 1813. From the Short Hand Notes of Mr. Gurney. To which are subjoined Two Proclamations, issued in consequence of the Result of those Proceedings. [in *British Labour Struggles: Contemporary Pamphlets. The Luddites. Three Pamphlets. 1812-1839. 1972.*]

- [8] Smart, W., *Economic Annals of the Nineteenth Century*. 2 Vols. Vol. I 1801-1820. 1910.
- [9] Sykes, D. F. E., *Ben O'Bill's. The Luddite*. 3 ed. [n. d.]
- [10] Thompson, E. P., *The Making of English Working Class, with revisions & postscript.* [Pelican Books.] 1968.
- [11] ———, Introduction to [6].
- [12] 穂積文雄, 英国産業革命史の一断面——ラダイツの研究——1956.
- [13] 真実一男, 機械と失業——リカード機械論研究——1959.
- [14] ———, 戦後のラダイト研究について (大阪市大経済学雑誌, Vol. 83 No. 4, 5., 1983. 1.)